

はじめに

中川 裕

千葉大学地域研究センター主催研究プロジェクト「アイヌ語の文献学的研究」も、今年度で6年目を迎え、その(3)を終了することとなった。もとよりこのプロジェクトは、フィールドワークという手法をとることがすでに困難になったアイヌ語の実証的研究において、音声データを含む過去の研究資料をどのようにデータとして活用していくかについて、方法論と実践の双方から検討していこうという試みであった。

本プロジェクトは基本的に、院生によって毎週水曜日に勉強会という形で推進されてきたものである。昨年度は人社研博士後期課程院生の深澤美香氏をリーダーとして進められてきたが、深澤氏が2017年3月に博士号を得て修了し、国立アイヌ民族博物館準備室の研究職員として札幌に移ってからは、同じく後期課程院生で本報告書の編集者である吉川佳見氏が後任の責を果たしてきた。勉強会には、後期課程院生の欠ヶ端和也氏、前期課程院生の唐柏炎氏、人文公共学府前期課程院生の阪口諒氏、人社研前期課程修了生の佐藤雅子氏、教育学研究科前期課程院生の安田京巳氏に加え、慶應義塾大学湘南藤沢校講師の藤田護氏、また浦野和枝氏、エフゲーニー・ウジーニン氏といった外部研究者も加わり、毎回活発な議論が交わされた。

2016年度 - 2017年度の大きなテーマのひとつは、以前から取り組んできた、2013年度 - 2014年度文化庁受託研究「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」による、平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵の萱野茂氏採録音声資料を中心とした分析である。この事業は平取町立二風谷アイヌ文化博物館との共同研究として実施され、地元のアイヌの人たちとの共同作業で、同資料の聞き起こし・解読作業を行ってきた。その成果は2015年に、国立大学法人千葉大学編『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次(北海道沙流郡平取町)』として刊行された。

本プロジェクトでは、同報告書に収録された、木村きみ氏と黒川てしめ氏による「イワン ヤマンコ(6人の山子)」の登場する2編の散文説話を出発点として、同種の散文説話の分析を行った。特に、このテーマについては藤田護氏が中心となり、北海道立図書館所蔵の「金成マツノート」に収録されているテキストの検討などを行った。

もうひとつのテーマは、2016年度 - 2017年度の文化庁受託研究「アイヌ語アーカイブ作成事業(平取)」による、同じく二風谷アイヌ文化博物館所蔵、川上勇治氏採録音声資料の聞き起こしと内容分析である。これも同博物館との共同事業として行ってきたもので、吉川氏をリーダーとし、上田とし氏の散文説話をおもな分析対象として進めてきた。その成果はアイヌ文化博物館より今年度の報告書として刊行予定である。

三つ目は、2017年度の北海道大学受託研究「アイヌ・先住民との文化的共生に関する総合的研究」のうち「言語資料の記録・保存・資料調査及び教材作成」の一貫として行った

帯広市図書館所蔵沼田武男氏採録アイヌ語資料の分析である。沼田氏は戦前に十勝地方で活動していた郷土史研究者だが、その膨大な調査記録を生前に公開することなく早世した。沼田氏の親族である安田京巳氏がその資料の中に、手書きのアイヌ語調査記録が大量に含まれていることを、兼ねてより指摘していたが、今年度帯広市図書館との協議の上、その資料を千葉大で分析することとなり、本プロジェクトの作業のひとつとして位置づけ、安田氏をリーダーとして推進してきた。

今年度は、その一部の口承文芸資料について解読を行い、また全体の目録作りを行ったが、その成果については今後、順次報告していくことになる。ただ、その作業の過程で、本資料が非常に正確なアイヌ語の記録であり、また時代的にも地域的にも非常に貴重なアイヌ語・アイヌ民族誌の資料であることが明確になってきた。まさにアイヌ語の文献学的研究というテーマにふさわしい資料の開拓を以て、今期を終了できたことは望外の喜びであり、たゆまずその解読作業を続けているメンバー諸氏に敬意を表したい。

(なかがわ ひろし・人文公共学府)